

Title	存在論の解体から構築へ -初期ハイデガーにおけるアリストテレス解釈-( Digest_要約 )
Author(s)	阿部, 将伸
Citation	Kyoto University (京都大学)
Issue Date	2013-09-24
URL	<a href="http://dx.doi.org/10.14989/doctor.k17908">http://dx.doi.org/10.14989/doctor.k17908</a>
Right	学位規則第9条第2項により要約公開
Type	Thesis or Dissertation
Textversion	none

存在論の解体から構築へ  
——初期ハイデガーにおけるアリストテレス解釈

阿部将伸

【論文構成】

序論 アリストテレスの現象学的解体とは何か

第1節 先行研究および時期区分について

第2節 現事実的生の解釈学

第3節 形式的告示とパウロ書簡の解釈

第4節 アリストテレスの現象学的解体

第5節 本論文の目標および構成について

本論

第1章 日常用語としてのウーシアーの意味射程

第1節 ウーシアーの二つの意味

第2節 プラークシスとウーシアー

第3節 ログスとウーシアー

第4節 ウーシアーからキーネーシスへ

第5節 現象学としてのアリストテレス哲学

第2章 ソピアーとキーネーシスの根源的探究

第1節 〈より良く見ること〉としてのテクネー

第2節 エイドスの明瞭性

第3節 〈最もよく見ること〉としてのソピアー

第4節 最根源的な世界の存在論的規定としてのエンテレケイア

第5節 現事実的生の「超越論的」解釈学

第3章 形式的告示としての根本概念ウーシアー

第1節 ウーシアーの術語的意味と通常的意味の関係

第2節 恒常的現前性としてのト・ティ・エーン・エイナイ

第3節 形式的告示としてのホリスモス

第4節 そのつどのト・ティ・エーン・エイナイ

第5節 存在論とは何か

第4章 限界画定から存在論の構築へ——結論に代えて

第1節 限界画定——現象学的解体の全体像

第2節 存在者全体と根本気分

第3節 芸術作品論から「出来事 (Ereignis)」の思索へ

第4節 本論文全体の結論

はじめに

存在への問いを呼び覚ますことを終世探究しつづけたマルティン・ハイデガー（1889-1976年）は、20世紀という時代にその問いを喚起することの歴史的意味を不断に問うた哲学者であった。それゆえハイデガーは自らの存在論を、伝統的存在論との対話と対決——ハイデガーの用語で言えば「解体（Destruktion, Abbau）」——と表裏一体のものとして構築している。伝統の解体はハイデガーにとってかくも不可避の課題だったのであり、解体がなければ構築もなかったと断じうるほどである。そして『存在と時間』（1927年）に見られるとおり、その主たる標的はアリストテレスのウーシアー論に見定められている（vgl. SZ, 19-27）。もちろんこれは恣意的な選択などではない。アリストテレスによるウーシアー（οὐσία、一般的な訳は「実体」）をめぐる考察が、いわゆる「実体論」として、その後の西洋哲学における存在論を根底から規定しつづけてきたことは自明だからである。

こうした事情を勘案するならば、伝統的存在論、就中アリストテレスのウーシアー論をハイデガーがどのように解したのかを掌握しないままに、ハイデガーの存在論を正確に理解することはできない。ましてやその真価を評定することなど——賞賛するにせよ拒斥するにせよ——なおさら不可能である。だからこそ、あらゆる研究者はアリストテレス解釈の重要性を意識しながら、ハイデガー存在論の解明に努めてきた。概して言えば、そこでは以下のような共通了解がすでに成立している。すなわちそれは、ウーシアーを「現前性（Anwesenheit）」として捉え、現前性に基づく存在了解を暗黙のうちに踏襲してきた伝統を批判することがハイデガーの目的であったというものである。

もちろんこうした理解が完全に間違っているというわけではない。しかし21世紀に入って、ハイデガーのアリストテレス解釈の姿を再検討する必要性が生じ始めた。というのは、ハイデガーがアリストテレス解釈に最も傾倒していた時期、つまり1921～1924/25年（この時期を本論文は「初期」と呼ぶ）の講義録・演習録が、ここ十年ほどの間にようやく公刊され出揃ってきたからであり、それら新たな資料から浮かび上がるのは、上述の共通了解に回収しきれないほどにアリストテレスに没頭するハイデガーの姿だからである。すなわち初期ハイデガーは、現前性としてのウーシアーを一方的に批判する以上に、アリストテレスの言葉を逐語訳しながら詳解し、ウーシアー論の積極的意義を何とかして掬い取ろうとしていたのである<sup>1</sup>。したがっていま求められているのは、アリストテレスへのこのような心酔ぶりを十分に取り込んだうえで、

---

<sup>1</sup> こうした初期の解釈姿勢が、アリストテレスの拒斥に傾きがちな後年の批判的態度とずれることに関しては、初期ハイデガーの講義・演習に参加していたガダマーがすでに報告している。「アリストテレスを掘り下げるハイデガーを導いていたのが批判的-破壊的な根本意図であったことは、今日誰も疑わなくなっている。〔講義を受けていた〕当時はその点についてはまったく明らかではなかった。ハイデガーが自らの解釈に持ち込んだ優れた現象学的な直感力によって、アリストテレスの原テキストは、スコラ的伝統の覆いと当時の批判主義が思い描く貧弱なアリストテレス像〔…中略…〕とから、根底的にしかも絶大な影響力を持つものへと解放され、そのテキストは予期しなかった仕方で語り始めたのである」（Gadamer [1987] 199〔 〕内及び傍点引用者）。

従来の研究を見直し、ハイデガーによるアリストテレス解釈の新たな像を提示することである。これこそが本論考の目指すところにはかならない。つまり本論文は、1921～1924/25年までの初期ハイデガー（この期間を一貫してハイデガーはアリストテレス論の出版を計画していた）がいかにアリストテレス哲学を解したのかを究明する。殊にハイデガーによるウーシアー解釈に焦点を絞って、この課題を果たすことが目標である<sup>2</sup>。これが達成されときにはじめて、ハイデガー哲学を評定する土台が確保されるであろう。

以上のように、本論考はハイデガー研究に寄与することを第一の狙いとするが、後世への影響という観点からしても本研究の意義は確かめられる。なぜなら、この時期のアリストテレス解釈を聴講していたのが、レーヴィット、ガダマー、アレント、ヨナスらだったからである。後に彼ら弟子たちはそれぞれが、古代哲学の独自の解釈を示しながら自説を展開するというスタイルを取るようになる。このスタイルがハイデガーに触発されたものであることは言うに及ばず、その内容にも、ハイデガーによるアリストテレス解釈の影響が見られるのである。さらに付言すれば、ハイデガーがこの時期のアリストテレス解釈のなかから磨き上げた「現前性」批判という争点が、デリダやレヴィナスを経由して、善かれ悪しかれ、人文社会科学全体に蔓延したことは記憶に新しいところだろう。したがって、初期ハイデガーにおけるアリストテレス解釈の解明は、ハイデガー研究者にとっての関心の的であるだけでなく、20世紀後半以降の哲学（のみならず人文社会科学全般）を学ぶ多くの人々に資するものとなるはずである。

## 序論 アリストテレスの現象学的解体とは何か

本論に入る前に、なぜ初期ハイデガーにとってアリストテレスが喫緊の解釈主題となったのか、いかなる視座に基づいてアリストテレス解釈が行われたのかを明確にする必要があるだろう。それゆえこの序論では、アリストテレス哲学に施された現象学的解体の目的と道筋とを予描する。

いわゆる「ナトルプ報告」（1922年秋執筆）<sup>3</sup>では、〈現事實的生の解釈学〉という初期ハイ

---

<sup>2</sup> たしかに新たに刊行された講義録等に基づく研究も出始めている（なかでも Yfantis [2009] がとくに重要である）。だがそれら先行研究の検討を通じて次のような問題点が浮き彫りとなる。すなわち、初期ハイデガーによるアリストテレス解釈の姿を、ウーシアーに的を絞りつつ、統一的に理解しようとする研究が絶無であることである。なぜこれが問題なのかと言えば、当該時期のウーシアー解釈の全貌が理解できなければ、伝統的存在論の解体とは何かを把握することができなくなり、ひいてはハイデガー自身が構築しようとした存在論の独自性・根源性を掌握することもできなくなるからである。したがって、初期ハイデガーにおけるアリストテレス解釈を、体系的・統一的に明らかにすること、しかも存在論にとって最も重要な概念であるウーシアーに照準を当てて考究することは、ハイデガー哲学を根底から理解し、その真価を評定するための基礎作業を成すと言える。本論考によってこの基礎作業の先鞭が着けられることとなる。

<sup>3</sup> 正式には「アリストテレスの現象学的解釈 (*Phänomenologische Interpretation zu Aristoteles*)」のタイトルを持つ。マールブルク大学へのハイデガー招致を考えていたパウル・ナトルプが、ハイデガーの研究状況等をフッサールに問い合わせ、それに答えるかたちで執筆されたため「ナトルプ報告

(Natorp-Bericht, Natorp-Aufsatz)」と通称される。つまりそれは、当時のハイデガーによる研究計画書・出版計画書だと言える。そしてこの計画書は、マールブルク大学のナトルプと、当時ハイデガー招聘

デガールの哲学的立場からアリストテレスを解釈することが宣せられている (vgl. GA62, 372)。現事實的生の解釈学とは、簡潔に言えば、世界との日常的な関わり方 (つまり「周囲世界体験」 (GA56/57, 70-73)) を端緒にして、生に固有な分節的存在構造 (これが「現事実性 (Faktizität)」の意味するところである) をその根本から究明することを指す。そして、それが果たされるのは、世界-内-存在としての各々の現事實的生が自らの根本経験 (各自に固有な死の可能性を握り持つ経験) へそのつど還帰することによってであると言われる。こうしたかたちで自らの在り方をそのつど根源へ向けて練り上げること、すなわち「根源的自己解釈」 (GA63, 18) を通じて、現事實的生の核心を成す「作動的リズム性 (funktionale Rhythmik)」 (GA58, 85, 175) 乃至は「そのつど性 (Jeweiligkeit)」 (GA63, 7, 29) が露わになってくる。つまり、〈そのつど何らかの仕方で現象する〉という現事實的生に固有の存在性格が、こうして浮き彫りになるとハイデガーは考えたのである。要するに現事實的生の解釈学は、〈世界と生自身とは根源的に何で在るか〉ということ、〈その両者の関わり合いはそのつど如何に在るのか〉に即して開示することを目指す。根源的自己解釈をそのつど遂行しながら、〈世界と生自身が何で在るのか〉を〈それらが如何に在るのか〉に立脚して根底から捉えること——初期ハイデガーの哲学的主題はここに存していた<sup>4</sup>。

以上のごとく現事實的生の解釈学の要諦は、各世界-内-存在が自らの根源的在り方に立ち戻りつつ、その在り方を哲学的な言葉へもたらすこと、つまり生きながらにして自らの在り方を存在論的な概念へと根源的に彫琢することにある。

ところで、いかなる現事實的生も無から言葉を創造することはできず、すでに伝承されてきた言葉を手がかりとして自らの言葉を練成しなければならない。そのため存在論的な概念を練成する過程のなかでは、存在論の伝統と向き合い、伝来の言葉を吟味する作業が不可欠となる。アリストテレス哲学の解体はここにおいて要請される。アリストテレスこそが伝統的存在論の起源に位置しているからである。つまり現事實的生の解釈学は、アリストテレスがいかなる方途で存在論にまつわる諸概念を構築したのかを問い、もしそれが現代の存在経験にふさわしくない言葉であれば斥けるという解体的な歴史遡行を果たさねばならない。このような解釈学的歴史批判の試みが「現象学的解体」にほかならない。

しかし注意しなければならないのは、初期ハイデガーがアリストテレス存在論 (つまりウー

---

に同じく興味を持っていたゲッティンゲン大学のゲオルク・ミッシュのもとへと送られた (結局ハイデガーはマールブルク大学に職を得る)。それゆえ「ナトルプ報告」には、①ナトルプに送付されたもの、②ミッシュに送付されたもの、③ハイデガーの手元に置かれていたものという三つの異なる版がある。①は戦争で失われ、②は1989年に『ディルタイ年鑑』第6巻に掲載され、③はまず2003年にレクラム文庫から、次いで2005年に『ハイデガー全集』第62巻の付録として出版されている。本論文では主として全集62巻に収められたテキストを用いる。

<sup>4</sup> 傍点を付した三つの契機をハイデガーは「遂行意味 (Vollzugssinn)」、「内実意味 (Gehaltssinn)」、「関連意味 (Bezugssinn)」と呼び、これら三つの意味契機の全体性に配慮しながら事象の存在構造を言葉へともたらすことが重要であると説く (GA60, 63)。これら三つに即した哲学的概念形成の手法、および、そのように形成された概念の読解手法が「形式的告示 (formale Anzeige)」であり、ハイデガー自身の現象学の方法論的支柱を担っていた (GA60, 55)。

シアー論)を全面的に斥ければ事が済むなどとは考えていなかった点である。むしろハイデガーは、アリストテレス存在論のうちに現事実的生の解釈学の姿を認め(西洋哲学史上アリストテレスにのみ認められるとさえ言われる)<sup>5</sup>、このことを明瞭にしたうえで、そこになおも残存する限界を批判するという解釈戦略を採用している。こうした二段構えの解体の道筋が、「ナトルプ報告」では「過剰照射(Überhellung)」と「限界画定(Ausgrenzung)」というかたちで提示されている(GA62, 372)。すなわち、アリストテレスが抱懷したウーシアーへの問いをわがこととして引き受け、存在論的な哲學術語としてウーシアーが磨き上げられるまでの解釈の歩みを徹底的に「追遂行(Nachvollzug)」(GA62, 7)したうえで(過剰照射)<sup>6</sup>、その練成の道のりを現代にそのまま移し置けないことを批判的に摘示していくのである(限界画定)。

根源的な存在論の遂行をアリストテレスが古代ギリシアにふさわしい仕方で為していたこと、だがしかしその遂行の道筋が現代とは異なること——現象学的解体によってこの二つが明らかとなる。ハイデガーは解体的なアリストテレス解釈を通じて、この厳然たる事実を自分自身に突きつけ、それでもって、自らの存在論が「〔伝統からの〕借り物の〔…中略…〕カテゴリー」(GA62, 390〔 〕内引用者)で覆われてしまうのを防ごうとした。畢竟するに、初期ハイデガーによるアリストテレスの解体はハイデガー自身へと向けられた自己批判であり、その自己批判としての伝統解体のなかから、新たな存在論(現代の根本的存在経験にふさわしい存在論)を構築する道が開かれてくるのである。

上記のとおり、初期ハイデガーにおけるアリストテレス解釈は、現事実的生の解釈学という視座に基づき、過剰照射と限界画定との二段階の手順を踏む。それゆえ、本論文の叙述もこの二段構成を踏襲する。ただし、初期ハイデガーが限界画定よりも過剰照射を前面に押し出していたこと、及び、この過剰照射の側面がこれまでまったく知られていなかったこと(これは初期の資料が長らく公表されていなかったことに起因する)に鑑みて、本論考は、アリストテレスによるウーシアー探究をハイデガーがいかにかに追遂行したのかという問いの解明に重きを置く。すなわち、第1章から第3章までをこの過剰照射的な解釈の究明に当て、第4章で限界画定の側面を考察することとなる。

以下では、細かい論証を詳述することはできないので、各章の結論と重要論点とをそれぞれ簡潔に記すこととする。

## 本論

<sup>5</sup> 「哲学は現事実性を明るみにもたらし、世界を見ることを学ぶという目標を持っている。そのような哲学の課題をふたたび了解するために、そしてそのような何かがすでにかつてあったのだということを見るために、歴史的な方向定位が今日必要とされている。われわれはアリストテレス哲学のうちにそのような探究を有しており、その探究は、見ることもおよび見られたものを展開解明することを真摯に行っていたのである」(HJ3:1922/23, 31 改行省略)。

<sup>6</sup> ハイデガーにとってアリストテレスのウーシアー論は、解釈の歩みを「追遂行」できるほどに〈現事実的生の解釈学〉に即していたのである。

## 第1章 日常用語としてのウーシアーの意味射程

哲学術語となるに先立って、ウーシアーは古代ギリシアにおける日常用語であり、「財産」や「所有物」を意味していた<sup>7</sup>。ハイデガーはアリストテレスのウーシアー論に言及する際、必ずと言っていいほどこのことに触れ、日常的なウーシアーの意味（「通常の意味」と呼ばれる）が哲学術語としてのウーシアーの意味（「術語の意味」と呼ばれる）の基礎となっていることに注目している。つまり、アリストテレスによるウーシアー探究の出発点はウーシアーの通常の意味にあったと見なされるのである。そのため、この通常の意味をハイデガーがどう解したのか（正確に言えば、アリストテレスがウーシアーの通常の意味をどう解したとハイデガーは解釈しているのか）を明瞭にしなければならない。

ハイデガーはウーシアーの通常の意味を、日常的な周囲世界との交渉のなかで出会ってくる存在者（つまり道具）の在り方を意味するものとまずは捉える。それは〈～するために役立つものとして出来上がって在ること〉である。たとえばハンマーは、私が釘を打つために役立つものとして、しかも鍛冶職人の制作によって出来上がった存在者である。これをギリシア語で言い換えれば、〈シュムペロンとしてのテロス〉となり、通常の意味でのウーシアーが指すのはこの〈シュムペロンとしてのテロス〉だとハイデガーは理解している<sup>8</sup>。

しかしハイデガーの解釈はここで終わりはしない。ハイデガーは、古代ギリシアにおける人間的現存在の規定をゾーエー・ブラークティケー・メタ・ログーと定式化しながら<sup>9</sup>、それに連繫させてウーシアーの通常の意味を次のように展開している。すなわち、〈シュムペロンとしてのテロス〉という在り方は、たんに個々の存在者に関わるものとしてではなく、それら存在者がはまり込んでいる指示連関たる世界の在り方を意味すると。そのみならず、アリストテレスによるキーネーシス（κίνησις、運動）の規定<sup>10</sup>を下敷きとすることによって、世界の存在構造たる〈シュムペロンとしてのテロス〉を〈デュナミスとしてのエンテレケイア〉に重ね合わせ、最終的にそれをキーネーシスと解するに至る。つまり、日常用語としてのウーシアーは、世界がキーネーシス（運動）として世界-内-存在（現事實的生自身）に出会ってくる仕方を意味する。

<sup>7</sup> Liddell & Scott [1968] 1274 を参照。

<sup>8</sup> シュムペロン（συνέρον）とは「有用な」、「～に役立つ」を意味し、テロス（τέλος）は「終わり」（ここでは制作の終わりとしての「出来上がり」）を意味する。なお、1924 年夏学期講義でのハイデガーによるシュムペロンの性格づけは、おもに『弁論術』第1巻第6章 1362a17-21 に負っている（GA18, 58-62）。また、制作された道具の指示性格をアリストテレスが捉えていたことに関しては、1924/25 年冬学期講義でも論じられるが（GA19, 41-42）、そこで示される典拠は『ニコマコス倫理学』第6巻第2章 1139b1-3 である。

<sup>9</sup> 『ニコマコス倫理学』第1巻第6章の記述（1098a3-4）に依拠してこの定式化は為されている（vgl. GA18, 43）。ゾーエー・ブラークティケー・メタ・ログーを普通に訳せば《言葉に即した実践的生》となるが、ハイデガーがそれを採用するはずもない。ハイデガーの解釈を踏まえて翻訳するならば、〈現にロゴスの真只中で気遣いとして世界-内-存在すること〉とでもなるだろう。

<sup>10</sup> 『自然学』第3巻第1章の以下の有名な文言である。「可能的にあるものの、そのようなものとしての〔可能的にあるものとしての〕エンテレケイアが、運動である（ή τοῦ δυνάμει ὄντος ἐντέλεια, ἢ τοιοῦτον, κίνησις ἐστίν,）」（Phys. III 1, 201a10-11 [ ] 内引用者）。

ハイデガーの解釈によれば、こうした意味でのキーネーシスがアリストテレス存在論の端緒に位置する。そしてこのような出発点の在り方は、初期ハイデガー自身の〈現事實的生の解釈学〉とまったく同じである。それゆえ「〈現事實的生の解釈学〉としての現象学」という身分を、ハイデガーはアリストテレス存在論に付与しようとしていたとすることができる<sup>11</sup>。

以上が第1章の結論であるが、この章で強調しておきたいのは次の二点である。一つは、ウーシアーによって意味される存在者の在り方のことを、ハイデガーがはっきりと「現存在 (Dasein)」と名指している点である。それは、存在者の存在がいかに立ち現れてくるのか、いかに出会われてくるのかという意味での〈如何に-存在〉 (Wie-Sein) を指す<sup>12</sup>。上述した世界のキーネーシスとしての在り方は、まさにこうした意味での〈如何に-存在〉、すなわち「現存在」にほかならない。「運動とは〈存在の如何に〉であり、[…中略…] すなわちキーネーシスは存在論的規定である」 (GA18, 372-373 [ ] 内引用者)。第二に強調したいのはロゴスの重要性である。ハイデガーはロゴスの十全な構造をレゲイン (λέγειν、語ること) とレゴメノン (λεγόμενον、語られるもの) の呼応関係として把握し、その呼応関係が「として-構造 (die Als-Struktur)」 (GA19, 609) のうちで表現されると考えている。すなわち、何かを何かとして語る人間 (レゲイン) へと向けて、語られる世界が自らを何かとして示現する (レゴメノン)。「として」の相互照応のなかで、世界が世界-内-存在へと立ち現れる仕方がキーネーシスであり、それがウーシアーの通常の意味に相当するのである。

## 第2章 ソピアーとキーネーシスの根源的探究

前章で確認されたウーシアーの通常の意味が、どのように根源化されて術語の意味へと練磨されたのかを明らかにするのが第2章の主題である。つまり、キーネーシスという世界の在り方がいかに根源化されたのか、根源的なキーネーシスとは何を指すのかがここで解明される。

この問いに答えるにあたってハイデガーが依拠するのは『形而上学』A 巻第1-2章である。というのもハイデガーは、そこで論じられているのが世界を開示する知の在り方の根源化であると解し、それに並行して世界の在り方 (キーネーシス) の根源化も同時に告げられていると解するからである。つまり、エムペイリアー (ἐμπειρία、通常訳は「経験」) やテクネー (τέχνη、通常訳は「技術」) といった日常的な世界開示の仕方がソピアー (σοφία、通常訳は「知恵」など) にまで高められるのに応じて、世界の動的在り方も、その動性のアルケー (ἀρχή、根源) に位置する天空 (οὐρανός、ウーラノス) にまで遡って把握されることになる。

かくして世界の在り方たるキーネーシスが根源的なかたちで捉えられるようになる。それは、

<sup>11</sup> 本稿脚注5参照。

<sup>12</sup> 「それゆえウーシアーは、1. 存在者を意味し、2. 〈存在の如何に〉、存在、存在性、現-存在という意味での存在を意味する。現-存在という意味でのウーシアーは、自らのうちに二重の意味を含んでいる。すなわち 1. 現存在者、2. 現存在者の存在である。」 (GA18, 25, vgl. GA18, 33, 347)。したがって、〈ウーシアー〉対〈Dasein〉という『存在と時間』におけるような構図で、初期ハイデガーによるアリストテレス解釈を眺めてしまったならば、多くの事柄を取りこぼしてしまうのである。



生成消滅を免れた存在者全体の恒常的円環運動として獲得される。この根源的キーネーシスが意味するのは、存在者たる限りの存在者すべてに関して、それぞれの現在の在り方のうちに、それらが起源（アルケー）において呈していたかつての在り方がそのまま回帰的に現前しているという存在構造にほかならない。ハイデガーによれば、アリストテレスはこのような本来的在り方を呈する存在者のことを、「エンテレケイア・モノン（ἐντελεχεία μόνον、端的なエンテレケイアにおいてあるもの）」（Phys. III 1, 200b26）と呼んでいる。したがって、古代ギリシアにおける本来的存在は「端的なエンテレケイア」<sup>13</sup>として了解されていたのであり、これがウーシアーの術語的意味——「出来上がって在ること」・「現在性」<sup>14</sup>——に合致するのである。このようにアリストテレスは世界の在り方の遡源という道を通して、ウーシアーの通常の意味を根源的な方向へと練り上げ、その術語的意味を手に入れた。ハイデガーはこう見なすのである。

本章では次の点を最も強く訴えたかった。すなわち、恒常的円環運動の相の下で存在者全体を眺め取るビオス・テオーレーティコス（βίος θεωρητικός、観想的な生）という実存様態を、ハイデガーが「本来的実存」だと明言していることである<sup>15</sup>。アリストテレスによれば、観想的生のうちで人間はわずかな時間であれ「不死になること（ἀθανατίζειν、アタナティゼイン）」（Eth. Nic. X 7, 1177b33）を達成する。もしハイデガーが現代の根本経験（自らの死の可能性を掌握する経験）を基準にしていたならば、ビオス・テオーレーティコスというある種の不死の経験を「本来的」などとは呼ばなかったはずである。それゆえ、ビオス・テオーレーティコスが本来的と見なされるということは、ハイデガーがあくまでも古代ギリシアの根本経験を基準に据えて、アリストテレスのウーシアー探究を解釈しようとしていたことを意味する。要するにここでのハイデガーは、アリストテレスのウーシアー探究が古代ギリシア的な根本経験に忠実に押し進められていたことを炙り出し、その探究の行程を最大限に評価しているのである。

日常的な現事實的生の在り方から出発して、そこに埋没することなく、そこから身を引き剥がして、世界-内-存在を可能にしている最根源的な存在経験に立ち戻ること。アリストテレスが遂行したウーシアー探究が描き出すこの道筋は、現事實的生の在り方の解釈学的根源化にほかならない。その遡源先としての根本経験の内実が現代のそれとは異なるにしてもである（いや異なるがゆえにと云ったほうが適切かもしれない）。エムペイリアーからテクネーを経由して

<sup>13</sup> 普通「完全現実態」などと訳されるエンテレケイアを、ハイデガーは「自らを-出来上がって在ることの-うちに-保持すること（Sich-ins-Fertigsein-Halten）としての現-存在の仕方」（GA18, 296, vgl. GA18, 368）と意識している。要するに、エンテレケイアは恒常的自己保持・自己回帰の運動を指すとハイデガーは捉えるのである。

<sup>14</sup> 「それゆえまとめるならば現存在〔ウーシアーが術語的に意味する〈如何に-存在〉〕とはすなわち、1. まずは現在性、現在のことを言い、2. 出来上がって在ること（Fertigsein）、出来上がり（Fertigkeit）を言う。——ギリシアにおける現の二つの性格。この両性格のうちで、すべての存在者はその存在の観点から解釈されえたのである」（GA18, 35〔 〕内引用者）。

<sup>15</sup> たとえば1924年夏学期講義でハイデガーは、「実存」を「そこにおいて現存在が本来的に存在するところの最終究極的な根本可能性」と規定したうえで、次のように述べている。「ギリシア人にとって実存とは、つまり現存在の根元的な根本可能性（die radikale Grundmöglichkeit des Daseins）とはビオス・テオーレーティコスである。すなわち、生は純然たる観想のうちに滞留する」（GA18, 44）。

ソピアーへ至る過程は、古代ギリシアにおける本来の実存への変様以外の何ものでもない。こう考えるからこそハイデガーは、アリストテレスによるソピアーの遂行を、身近な周囲世界に埋没してしまうことに対する「対向運動 (*Gegenbewegung*)」として特徴づけたのである (GA19, 98, vgl. GA62, 75-76)。

### 第3章 形式的告示としての根本概念ウーシアー

ウーシアーの術語的意味に辿り着くまでの経過をこれまで見てきたが、それでは当の術語的意味をハイデガーはどう捉えていたのか。これを明確にするのが本章の課題である。アリストテレスは『形而上学』Z巻のなかで、ウーシアーの意味するところとしてト・ティ・エーン・エイナイ ( $\tau\acute{o} \tau\acute{\iota} \tilde{\eta}\nu \epsilon\acute{\iota}\nu\alpha\iota$ 、通常訳は「本質」)<sup>16</sup>を論じている (vgl. Met. Z4-6)。したがって、このト・ティ・エーン・エイナイをハイデガーがいかに関解したのかを明らかにできれば、「アリストテレス哲学の根本概念そのもの」(GA18, 22)としてのウーシアーの術語的意味が判明するはずである。

ハイデガーはまず、ト・ティ・エーン・エイナイのなかの「エーン ( $\tilde{\eta}\nu$ )」がエイナイ ( $\epsilon\acute{\iota}\nu\alpha\iota$ 、在ること)の未完了過去時制であることに着目し、生成・運動のアルケー (根源)を表現するものとしてこのエーンを読んでいる。その結果、ト・ティ・エーン・エイナイは次のごとき意味を有する存在論的概念として把握される。すなわち、〈かつての根源的な在り方が現在の在り方に回帰して現前していること〉という意味、ハイデガーの言葉で言い直せば「出来上がって在ること」「恒常的現前性」という意味である。このようなト・ティ・エーン・エイナイの理解が、先の第2章の結論と一致していることが確かめられるであろう。

ここまでならば、従来から広く知られていた「ウーシアー＝現前性」というお馴染みの公式のくり返しにすぎない。しかし初期ハイデガーは、過剰照射的な解釈のなかで、より複雑かつ積極的な意義をウーシアーに見出そうとしている。

それを理解するには、『形而上学』でト・ティ・エーン・エイナイを語るロゴスと規定されるホリスモス ( $\acute{o}\rho\iota\sigma\mu\acute{o}\varsigma$ 、通常訳は「定義」)<sup>17</sup>をハイデガーがどう解釈したのかが、重要な手がかりとなる。その独特な解釈によると、ホリスモスは、いわゆる「定義」(最近類と種差による本質内容の規定)などではなく、「形式的告示 (*formale Anzeige*)」として把握されねばならない。形式的告示とは、ここではごく簡明にしか記せないのだが、〈根源にまで遡って存在を了解する営為〉が各人の担うべき自己固有の課題であることを自覚させるような仕方、哲学的な

<sup>16</sup> ト・ティ・エーン・エイナイは、「 $\tau\acute{\iota} \tilde{\eta}\nu \epsilon\acute{\iota}\nu\alpha\iota$ 」(ティ・エーン・エイナイ)という疑問文に定冠詞が付されて術語化されたものである (したがって「本質」という慣習的な訳語も多分に解釈の入り込んだ意識にすぎない)。この疑問文は、エーン ( $\tilde{\eta}\nu$ ) という未完了過去時制を用いながら、問いかけられている対象に関して、「そもそもそれは一体何であるのか」を尋ねる表現であった。エーンを使ったこのような問い方、あるいはこの問いに答えるにエーンを用いる仕方は、古代ギリシアにおいてある程度流布していた。アリストテレス以外の用例を挙げているハイデガーもこの点は知悉している (HJ3:1922/23, 38)。

<sup>17</sup> vgl. Met. Δ8, 1017b21-23, H1, 1042a17

言葉（概念や定義）を形成する手法である<sup>18</sup>。ハイデガーはホリスモスのうちにまさにこのような形式的告示を見出している。それゆえ、形式的告示としてのホリスモスによって語り示される概念、つまりト・ティ・エーン・エイナイには次のような性格が備わることとなる。すなわち、それを読解しようとする者をして各人の具体的状況（そのつどの具体的存在者と出会う経験）へと立ち戻らせ、そこから存在論的概念を各自なりに遂行的に仕上げるよう各実存に要求するという性格である<sup>19</sup>。存在への問いを各々がそのつど遂行するなかでのみウーシアーが了得されることを、ト・ティ・エーン・エイナイは告げているのである。

したがって、各実存による存在論の遂行の現場を離れてしまうと、ト・ティ・エーン・エイナイとしてのウーシアーを理解することができなくなってしまう<sup>20</sup>。ハイデガーの解釈にしたがうならば、アリストテレスのウーシアー論の特性はまさにこのような遂行的性格に存していた。アリストテレスは、存在が何を意味するかをたんに客観的に述べたのではない。そのウーシアー論はむしろ、各実存が自らに固有の課題として存在への問いを引き受けることを促すような存在論、各自が世界-内-存在としての自らの在り方へとくり返し立ち帰ることを要求するような存在論、そうした根源的な自己覚醒のなかでしか存在が了得されえないことを厳しく迫る存在論だったのである。そうだとすると、存在論がそのつど遂行されるか否かは各実存による決断に委ねられ、その結果、この存在論は偶然性や可能性へと開かれることになるだろう。だが、これこそ初期ハイデガーが、アリストテレスのウーシアー論の特徴として際立たせたかったものにほかならない。

以上より、初期ハイデガーは存在論のあるべき姿——問いとしての存在論、そのつどの探究としての存在論、偶然性や可能性に開かれた存在論——を、アリストテレスによるウーシアー探究のうちに読み込みつつ、それをそこから学び取ったのだと結論づけることができる。

本章で指摘したかった論点の一つはウーシアーのラテン語訳の問題である<sup>21</sup>。substantia あるいは essentia という語によってウーシアーは翻訳されたのだが、これらの語は日常的には馴染みのないテクニカルな用語であり、こうした訳語によるのではウーシアーが有していた二義性（通常の意味と術語の意味）を伝えることができない。なぜこれが問題かと言えば、根本概念ウーシアーに備わる形式的告示の機能が忘却されてしまうからである。古代ギリシアの人びとであれば、アリストテレスの哲学的なウーシアー論を見聞したうえで、普段何気なく「ウー

<sup>18</sup> 形式的告示については本稿脚注 4 も参照のこと。

<sup>19</sup> ハイデガーはト・ティ・エーン・エイナイの「完全な表現」を、『形而上学』Z 卷第 6 章 1031b7 での「ト・ティ・エーン・エケイノー・エイナイ (τὸ τί ἦν ἐκεῖνον εἶναι)」だと解することによって (HJ3:1922/23, 38, 41)、ト・ティ・エーン・エイナイの形式的-告示的性格を導き出している。

<sup>20</sup> 各自がソピアーを発揮してウーシアー探究をそのつど遂行する現場を離れると、ウーシアーの存在論的身分に関してそれが essentia なのか existentia なのかという問いや、ウーシアーは個的存在を意味するのか普遍的存在を意味するのかという問題が生じる。ハイデガーはこのように考えていた。以下の言葉を参照。「ウーシアーの根幹 (οὐσία-Stamm) は、『何で在る』と『～が在る』とが区別されずにいる」(GA62, 297, vgl. GA18, 222-223)。

<sup>21</sup> ウーシアーのラテン語化の問題に関しては、とくに田中 [1987] 129-137, 164-186 と Owens [1951] 65-75 を参照。

シアー」と呼び慣わしている存在者との交渉の場に立ち戻り、そこから各自のウーシアー探究を始めることが容易にできたであろう。しかし日常用語から乖離したラテン語による翻訳——およびそれをそのまま引き継いだ近代ヨーロッパ諸語によるさらなる翻訳——を通じて、根本概念ウーシアーに備わっていた形式的-告示的性格が失われてしまった。これは、日常的に生きる世界-内-存在へ還帰する道を西洋存在論が見失いつづけてきたことと同義である。

こうした忘却の伝統を揺さぶるべく、初期ハイデガーはアリストテレス存在論の過剰照射を試みたと言える。つまり、伝統を遡りその壁を突き破って、アリストテレス本人に「私はこのように存在の問いのうちに生きたのであり、各人も自分なりに存在の問いを探究せよ」と語らせるために、ハイデガーはウーシアー探究の道のりをわがこととして引き受け、根本概念ウーシアーを形式的告示として浮き彫りにしようとしたのである。

参考：過剰照射の解釈の構図（通常の意味と術語の意味の関係はとくに GA18, 25 を参照）

	現存在者	現存在・〈如何に-存在〉
ウーシアーの通常の意味	特定の存在者 =意のままになる道具	有意義性 =キーネーシスとしての 世界の在り方・現存在
ウーシアーの術語の意味	すべての存在者	恒常的円環運動という 世界の根源的在り方 <ul style="list-style-type: none"> <li>出来上がって在ること (被制作性)</li> <li>・ 現在性 (恒常的現前性)</li> </ul>

①キーネーシスとしての世界の在り方の根源化      ②形式的告示による還帰

(網かけ部は非主題的に了解されていることを表す)

#### 第 4 章 限界画定から存在論の構築へ——結論に代えて

この最後の章では、過剰照射的解釈を踏まえたハイデガーがいかなる限界画定を施したのかを解明し、その後のハイデガーによる存在論構築の道を素描する。

限界画定とは、古代ギリシアと現代との間にある根本的存在経験の差異ゆえに、アリストテレス存在論をそのまま現代に持ち込めない箇所を摘出することを意味する。これを為すことによって、アリストテレスによるウーシアー探究の道筋と、現代の根本経験に立脚した存在論構築の道筋との分岐点が確固たるものとして把握できるようになり、ひいては、現代にふさわしい存在への問いを追究するにあたって、伝統由来の借り物のカテゴリーを無批判に用いることを防げるようになる。

ではどこに限界があると見なされたのか。それは、ウーシアー論が世界-内-存在を構成する一契機たる世界の側に偏した存在論であったという点にある。世界の側に属する存在者としてのウーシアーを出発点とし、世界の在り方を最根源的なところまで遡行することによって、アリストテレス存在論の中心概念ウーシアーは磨き上げられた。当然ながら、この道行きはアリストテレスにとっては、自らの根本経験——アタナティゼイン（不死になること）としてのピオス・テオーレーティコス——に即したものであった。だが現代に生きるハイデガーがこれをそのまま反復するわけにはいかない。このような仕方ではアリストテレス哲学の影響を押し止めるのが限界画定である。

そして限界画定を踏まえたハイデガーは、世界-内-存在を構成するもう一つの契機、すなわち内-存在としての実存に足場を置き、現代の根本経験——自らの死の可能性の掌握——にふさわしい存在論の探究へと赴いたのである。

だがしかし、ここで思い起こすべきは、そもそもアリストテレス存在論のうちにすでに、各実存をしてそれぞれの根本経験へ差し向けるという指示的性格が宿っていたことである。初期ハイデガーがこう解していたことは前章にて確認したとおりである。ハイデガーはこの指示に率先して従うことで、アリストテレスとは異なる自らの根本経験へ立ち戻り、新たな存在論を構築したと見ることができるだろう。この指示そのものはアリストテレスから発するのである。アリストテレスとは異なる存在論の構築に進まねばならないことそれ自体を、ハイデガーは解体的な解釈（過剰照射と限界画定）を通じてアリストテレスからの指示として聞き取った。自らの現事実的生に忠実に存在論を仕上げたアリストテレスに即するからこそ、ハイデガーはいま現在の自分自身の現事実的生を基礎にして存在論を築こうと試みたと言える。解体を通じてのみ構築は生じうるのである。

本論文は、資料不足ゆえに従来見落とされていた過剰照射的解釈を重点的に明瞭にしたのであるが、これによってはいじめて、ハイデガー哲学のうちで解体と構築がどのような仕方では緊密に結びついているのかがはっきりと見えてきたであろう。アリストテレスから受け取った哲学探究への指示を、ハイデガーは現代に即したかたちで根源化しつつ、自らの存在の問いへと向かったのである。それと同時にハイデガーは、アリストテレスから発する哲学探究への指示を講義のなかで弟子たちへと伝えていった<sup>22</sup>。後世の彼らが、それぞれ古代ギリシア哲学との対話のなかから独自の哲学を編み出していったことを思えば、ハイデガーによる〈哲学する実存の伝達〉<sup>23</sup>はたしかな実を結んだと見てもよいのかもしれない。

<sup>22</sup> 1924年夏学期講義でハイデガーは、聴講者に向かって「アリストテレスの諸概念をあなたがたが使いこなすこと」が重要なのではなく、「むしろ、アリストテレスが自らの立脚地と探究領域において行ったことを、あなたがたが自らの立脚地と探究領域において行うこと、すなわち、事象を〔アリストテレスと同じ根源性と真正性のうちで見て取り規定すること〕のみが肝心であると語る（GA18, 15〔 〕内引用者）。

<sup>23</sup> ハイデガーは形式的告示の概要を「実存伝達（Existenzmitteilung）」（GA60, 136）に見ていた。この見解は、パウロの言葉を形式的告示として解釈するなかで提起されたものであるが、先述のとおり、ハイ

- ・ハイデガー全集 (Martin Heidegger, *Gesamtausgabe*, 1975-) からの引用は、Vittorio Klostermann 版に従い、GA と略記したうえで巻数・頁数の順で示す。
- ・それ以外のハイデガーからの引用は、以下の略記号とともに頁数を付して示す。

HJ3:1922/23 : Übungen über Phänomenologische Interpretation zu Aristoteles (Nikomachische EthikVI; de anima; MetaphysikVII) (Wintersemester 1922/23), *Heidegger-Jahrbuch* 3, 2007.

- ・アリストテレスからの引用・参照は、ハイデガーがもっぱら参照していた Teubner 版を底本とする。ただし引用・参照に際しては、慣例どおり Bekker 版に従って、著作名と巻数・章数・頁数・行数を付す。
- ・引用文中の 〈 〉 は、語のまとまりと読みやすさを考慮して引用者が付したものである。

#### 【参考文献】

- Gadamer, Hans-Georg [1987] : *Hans-Georg Gadamer Gesammelte Werke Bd. 3, Neuere Philosophie : Hegel-Husserl-Heidegger*, J. C. B. Mohr (Paul Siebeck), 1987.
- Liddell & Scott [1968] : *Greek-English lexicon : with a supplement*, revised by H. S. Jones, Clarendon Press, 1968.
- Owens, Joseph [1951] : *The doctrine of being in the Aristotelian Metaphysics : a study in the Greek background of mediaeval thought*, Pontifical Institute of Mediaeval Studies, 1951.
- 田中 美知太郎 [1987] : 「substantia」、『哲学論叢』第2輯(1935年)、第6輯(1939年)、東京理科大学大塚哲学会編、『田中美知太郎全集』第5巻に再録、加来彰俊ほか編、筑摩書房、1987年、127-186。
- Yfantis, Dimitrios [2009] : *Die Auseinandersetzung des frühen Heidegger mit Aristoteles : ihre Entstehung und Entfaltung sowie ihre Bedeutung für die Entwicklung der frühen Philosophie Martin Heideggers (1919-1927)*, Duncker & Humblot, 2009.

---

デガーは哲学上の概念や定義を形式的告示として捉えようとしていた。形式的告示としてのパウロの言葉が〈信仰する実存の伝達〉であったとすれば、ハイデガーはアリストテレスの言葉を〈哲学する実存の伝達〉として把握し、自らの言葉をもそのような実存伝達として練り上げようとしていたと言える。